

愛と献身の生涯

前川 太市

『少にして学べば、すなわち壮にして為すところあり。壮にして学べば、すなわち老いて衰えず。老いて学べば、すなわち死して朽ちず。』

佐藤一斎「言志四録」

暖かい君子

机の上に「水上先生講義抜粋」と書かれた大阪工業英語研究会(OSTEC9)の記録が7冊ある。なつかしい徳永さんの筆跡である。改めて、ありし日の徳永さんの姿がよみがえってくる。まさにこれは、徳永さんの会員に対する、凝集した熱いメッセージそのものである。

わたしがこの会に参加したのは、1980年1月である。当時徳永さんは、セミナー当日の記録をまとめて欠席者に必ず送っておられた。たいへんありがたいことであった。しかし、送る側としては必ずしも楽なことではなかったであろう。ある日のセミナーからの帰り道、そのことを徳永さんに言ったことがある。

答えは意外であった。セミナーが始まった頃、欠席者の一人から

- 当日のセミナー記録を必ず報告してほしい。
- と抗議があったというのである。

これは、この種の研究会、講習会の受講者としては、少し過大な要求とすべきものだろう。会の責任者は幹事として、せいぜい当日の教材ぐらいは欠席者に送るとしても、欠席者は自己の責任で当日出席した人のノートを借りるなり、尋ねるなりして自分で補うのがむしろ常識というものである。したがって、幹事としては、こういう場合ドイツ人ならそうするように

- 幹事はこのような義務を負うものではない。

とつっぱねるか、または日本的に

- 現在多忙につきそこまで致しかねますのでご諒承ください。

とソフトに断るか、いずれにしても拒否してもおかしくない場面である。

しかし、徳永さんはそうは考えない。

- 大枚をはたいて、工業英語を学ぼうとしている人だから、熱意のあまりそういう要求が出てくるだろう。そう思って欠席者に当日のまとめを送り始めたのです。と徳永さんは言われる。

— やってみると、自分にとって、たいへん良い勉強になるのです。やって良かったと思います。

と語った徳永さんの顔は、さわやかであった。

わたしは、現在すでに死語になっている「君子」ということばを思い出していた。この徳永さんの態度は— 人知らずしていからず、亦た君子ならず乎（論語、学而第一）の心境に近い。徳永さんはあくまで暖かいのである。

常に学ぶ姿勢

これを書くために、わたしの日記を繰ってみると1981年1月23日につぎの記述がある。

— 10時半、阪急高槻駅で村田氏と待ち合わせ、徳永さん宅に行く。村田さんは足が弱くなったとて、タクシーで行く。隣家の枝さんも来。昼食をはさんで、夕方4時頃まで歓談。村田さんの話面白し。

徳永さんは過去4年の水上先生の講義の記録をまとめ、冊子にして皆に配布したいという。

村田さんはこの5月で80歳になるよし。

この日、長老村田さんのお話を聞くということで、当時高槻の八丁畷に住んでおられた徳永さん宅を訪ねたのである。思い出してみると、戦前から住んでおられたと言う徳永さんのこのお宅には、わたしは数回お邪魔している。静かなお住まいで、大阪工業英語研究会事務局の札がかかっていた。

当日は村田さん専ら話役で、その波乱満場ともいうべき内容は刺激的であった。考えてみると当時徳永さんは75歳、ご二人の元気ぶりにはおどろかされる。そしてこの日は、「水上先生講義録」の決意を徳永さんから初めて聞かされた、記念すべき日となった。

なお、村田さんの無くなったのは徳永さんと同じ88歳、葬儀の日は1989年9月17日、その日は水上セミナーの日で、わたしは水上先生と、当時一緒に幹事だった三井さんと葬儀に参列した。徳永さんの葬儀の日もグループ研究会の日であったことを思い合わせると、何やら因縁めいたものを感じる。

その日は村田さんの話で強く印象に残っているのは、「人間は死ぬまで生きた社会と接触しなければダメです。」断定的に言われたことである。このことは、わたしも年をとるにつれて実感として切実に感じるようになっていく。徳永さんが、熱心に村田さんの話を聞き、しきりにうなずいてお

られたのを覚えている。徳永さんは、このように周りの人からも絶えず学ぼうとする姿勢を失わない人であった。

オブティミズム

徳永さんからは、ずいぶんたくさんの手紙やハガキをいただいている。例えば、1990年5月1日つきのつぎのようなハガキがある。

風薫る良い季節となりました。本日は林さんより次のグループ研究会のための御労作を送って頂きました。この会は皆さんの歯に衣をきせぬカンカンガクガクの議論に魅力があり、これをきくのが好きで出席させていただいておりますが、5月は息子夫婦の誘いで山陰地方へ2泊3日の旅行に行きますので勝手乍ら欠席させていただきます。水上セミナーには必ず出る予定です。林氏にもおことわりしましたが、どうか出席に皆様によるしく。

これなど、たいていの現代人は電話ですませる内容である。しかし徳永さんは常に折り目正しい。きちんと書簡をよこされた。そしてその内容が、何と簡にして要を得ていることだろう。

当時（いまでも基本的には変わっていないと思うが）グループ研究会では、

互いの和訳分についてきわめて率直な批判が飛びかっていた。率直なあまり、気の弱い人、初めて参加した人、特に女性には少し率直すぎるのではないかという陰の声があった。わたしはある機会に徳永さんに、ちょっとそのことに触れてみた。徳永さんは「そうですね」と言って笑っておられただけであった。けれども、

— この会は皆さんの歯に衣をきせぬカンカンガクガクの議論に魅力があり、これをきくのが好きで出席させていただいております。

といことばの中に、さりげなくその回答が含まれているのである。いいかえると、徳永さんは「少なくとも、わたしはそんなことは気にしていませんよ。いずれ落ち着くところへ落ち着くでしょう。」と言うメッセージを送られたのだと思う。そして、現在もグループ研究会が隆盛に行われているのは、徳永さんの見通しが正しかったことを示している。

徳永さんは君子であったが、けっして古い道学者流の瑣末主義はなく、まして老人によくある愚痴っぽさや小言幸兵衛とは無縁であった。衰えない精神の若さが常にあった。

わたしは徳永さんの信条の一つとして、いまの若い人には聞き馴れないかもしれないが、塞翁（さいおう）が

馬ということばを伺ったことがある。これは徳永さんの人生経験から発せられたことばであった。若い徳永さんは学校を出て、鉄の神様といわれた本多光太郎の有名な金属材料研究所に入ったが、ほどなく民間に転出された。その間のいろいろな悩みがあったようであるが、間もなく始まった第2次世界大戦で潜水艦に必要なバッテリーを製造する仕事に従事することになり、戦争に必要な技術者ということで兵役を免れたのであった。

— だからわたしは、子供や孫たちに、少しくらい意にそまぬ立場にあっても、塞翁が馬ということのを忘れてはいけない。

と論すことがあると徳永さんは言われた。これは一種のオプティミズムであり、徳永さんの精神の若さの背後にはこの種のオプティミズムがあったように思われる。

俳人「槻彦」

わたしは俳句にはまったく不案内である。戦後すぐに出た、桑原武夫の「第二芸術論」に共鳴し、俳句の詩神に見放されたからであろう。

徳永さんは槻彦と号する俳人でもあった。どうしてもここで俳句に触れないわけにはいかない。徳永さんは、

もちろん「第二芸術論」は知っておられた。しかし意見らしいものは何も言われなかった。詩神に見放された人間に、詩について語っても仕方が無いと考えておられたに違いない。俳諧においても徳永さんは君子であった。

徳永さんによれば、どのことばを選ぶかと句作に苦心しているとき、パッとあることばが浮かぶ、この瞬発力がとても重要で、これは翻訳の場合とまったく同じだというのである。その意味で水上先生が提出される、オン・ザ・スポットの課題はたいへん面白い、というのが徳永さんの持論である。そして上手な師匠が、一つのことばを訂正しただけで、駄句が一瞬にして生きてくるように、水上先生が会員の書いた文章の個性を生かしながら、通用する文章に添削される手腕に深い敬意を評されるのであった。

翻訳のプロとして仕事をする以上、疑問点を調べ、辞書を引き、推敲することは当然だが、仕事には納期があり自ずとそれらには限度がある。結局勝負は瞬発力である。じっさい、日本文であれ外国語であれ達意の文章を大量に書けるプロの物書きとは、瞬発力のきわめて大きい人に違いない。そう思って、徳永さんの俳句と翻訳の相関性を興味深く聞いた。これについては、

本誌にも「工業英語」1989年7月号の徳永さんの「翻訳と俳句の相关性」を再録したので参照していただきたい。

つぎに徳永さんの句を二つあげておく。一つは1989年8月吉日とあり、現在のお住まいへの転宅通知とともに詠まれたものである。

50年にわたり住み慣れた高槻の地を去ることは感慨一入ですが、「終の住処」で子や孫の世話になりながら好きなことをして余生を楽しむのも一興かと思っております。

どうか今後共よろしく御願い申し上げます。とあって、

これがわが終の住処か木槿咲く（槻彦）

徳永さんは毎年、年賀状に一句を添えられたが、1992年のつぎの句がわたしの知る最後のものである。

頌春

正月の7日で86歳をむかえることとなります。この頃の1年は富士登山で言えば胸突き八丁という所ではばかり見て喘ぎながら登っております。

どうか本年もよろしく。

形見にと呉れし絵の花福寿草

平成4年元旦

情熱を支えたもの

1992年になると徳永さんも例会へも欠席されることが多くなった。腰が傷むということであった。

その間も、わたしは時おり情報を送っていた。1993年2月16日の朝日新聞に載った日本工業英語協会常任理事、山本忠氏の「工業英語後進国からの脱皮」をお送りししたのに対し、徳永さんからつぎのような礼状をかねたハガキをいただいた。これが、わたしの徳永さんから受け取った最後の便りとなった。

拝復、昨日は朝日新聞の切り抜きをお送りくださり有り難うございました。日本の工業英語の現状がよく分かる記事でした。いつも御厚意のほど感激致しております。何を持ってお報いしたら良かろうかという心持ちです。わたしの腰痛は相変わらずですが目はよろしく、TIMEも含めて乱読に近い程よく読んでおります。その内八木アンテナの本も読みたいと思っております。先ずは切り抜きのお礼まで。

4月11日

さいごの八木アンテナの本、というのはその頃出たばかりの松尾博志著

「電子立国日本を育てた男」（文芸春秋社刊）をさす。この本は八木アンテナで有名な八木秀次博士の伝記で、八木が東北大学在職中にいわゆる八木アンテナの原理を発見したいきさつが、きれいごとでなく洗いざらい書かれていて面白く、徳永さんに一読をすすめたのである。

それにしても、この頃なお TIME を乱読に近い程よく読んでいる、というのには驚く。それだけではない。徳永さんは、当時毎日新聞に連載されていた、「キーワード」なる時事英文の切り抜きを OSTEC 会員のためにと、幹事の所に送ってこられている。これはまとめて、コピーされ会員に配布されたが全部で 83 ページに及んでいる。切り抜きの最後の日付は 1993 年 7 月 24 日（土）と、はっきり徳永さんに字で書かれている。

これはもう情熱としかいいようがない。このような情熱はどこからくるのだろうか。いま、わたしは、アルバート・アインシュタインのつぎのことばを思い浮かべている。

Nothing truly valuable arises from ambition or from a mere sense of duty; it stems rather from love and devotion towards men and towards objective things.

(A. Einstein, THE HUMAN SISE)

これは書物に書かれた文章ではない。アメリカのアイダホの農民に息子が生まれ、その子供をアルバートと名付けたので、息子の将来のお守りに何か書いて欲しいとその農夫がアインシュタインに頼んだ。アインシュタインがこれに答えて、1947年7月30日にアルバート君に贈った言葉である。

まさに「人々への、そして対象となる事柄への愛と献身」が徳永さんの大阪工業英語研究会に大して示された態度であり、恐らくそれは同時に徳永さんの生涯を貫いた生き方であったように思われる。